

県立図書館だより

平成29年2月

青森県立図書館報 第27号

青森県近代文学館では平成29年2月25日(土)から5月24日(水)まで、企画展示室において「青森県俳句懇話会寄贈資料展」を開催します。

青森県俳句懇話会寄贈資料展



平成28年に青森県俳句懇話会から寄贈された資料は636点にのぼります。本展ではこれらの資料のうち選りすぐりの資料を展示します。

今回のように一つの団体が会員に募って資料を収集し、一括して寄贈することは非常に珍しいことです。県俳句懇話会へ感謝の意を表すとともに、その貴重な資料を有効に活用して俳句の持つ魅力を多くの県民に紹介するために企画した展示です。

●主な展示資料

- ・ かねことうた
か 金子兜太葉書
 - ・ 中央俳人の原稿 (金子兜太・桂信子・長谷川かな女^{じよ}・安住敦など)
 - ・ 角川俳句賞副賞 (村上しゅら・木附沢麦青^{きつけざわばくせい})
- ☆角川俳句賞は俳句誌「俳句」(角川学芸出版)主催の公募による俳句新人賞で、俳人の登竜門として知られ、「俳句界の芥川賞」とも呼ばれている賞です。
- ・ このほか、県内外の著名俳人の色紙や短冊を多数展示します。

目 次

青森県俳句懇話会寄贈資料展	1
こんなレファレンスがありました	2～3
こどものひろば【拡大版】	4～5
ご存じですか？この資料	6
ようこそ文学館へ！	7
カウンターからひとこと	8

～ こんなレファレンスがありました ～
【第24回】

故郷（ふるさと）の話題読み語り

「ミステリアス、ミステリー！時は謎をつくる」



青森県立図書館は、平成28年末、コンピューター・システム更新のため、長期間のお休みをいただきました。大変ご不便をお掛けしましたが、皆様のご理解とご協力のもと、無事、再開することができました。ありがとうございました。

皆様に、図書館を一層ご利用いただくため、休館中に取り組んだ一つに、展示コーナー移設・リニューアルがあります。

その第一弾の展示として「青森ねぶた写真展「追想」」を開催しました。多数、ご来場いただき、併せてお礼申し上げます。

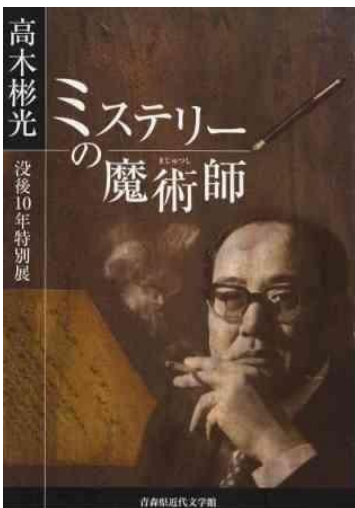
昭和から平成へと歴代約1,200台ものねぶたの写真は、今回資料提供いただいた弘前大学大学院 工藤智哉氏が編纂した資料『青森ねぶた全集』全8巻で、「年代別」「作者別」「題材別」など、より詳細な資料として、いつでも、ご覧いただけます。



さて、この展示の期間中にねぶたに関するご質問をいただきました。今回は「ねぶた」ではじまる推理小説の話です。

【質 問】

高木彬光著『悪魔の火祭』（角川文庫 1979）を読んだのですが、青森ねぶたの掛け声を「ラッセラーラッセラー」ではなく、「ラッセラッセ」と書いてありました。誤植でしょうか？



写真は、平成17年青森県近代文学館で開催された「高木彬光没後10年特別展「ミステリーの魔術師」」の図録

高木彬光は、大正9（1920）年生まれ、青森県を代表する作家であり、戦後日本の推理小説界を牽引した一人です。

彬光は、昭和18（1943）年、京都帝国大学を卒業後、中島飛行機製作所の技師となりますが、終戦とともに中島飛行機は解散、職を失います。

職探しをしていた時、大道の易者から「作家になれば大成する」と、言われ、小説家になることを決意、デビュー作『刺青殺人事件』を書き下ろします。とは言っても、出版の当てもなかった彬光は、再び易者を訪れ、その助言により原稿を江戸川乱歩に送り、認められて出版に至ります。

このデビュー作が好評を博し、作家の道を歩むことになり、後に「刺青」や「占い」の本の出版にも係わっていきます。

易者の助言が切っ掛けとは、ミステリーではありませんか。

さて、お問い合わせの作品は、書き下ろしで、昭和33年4月に桃源社から刊行されたものです。

当館で所蔵する桃源社ポピュラーブック（桃源社 1966）では「ラセラセ」、文華新書・小説選集（日本文華社 1977）では「ラッセラッセ」となっていました。「ラセラセ」から「ラッセラッセ」と筆が入っていますので、どうやら誤植ではないことが分かります。

その答えは、私たちが「青森ねぶた」のことを調べる際に頼りにする本『青森ねぶた誌』（宮田登、小松和彦監修 青森市発行 2000）にあります。

※ 平成 28 (2016) 年、増補版が発行されましたので、新しい本で紹介します。

「ハネトの掛け声」の項 (p 171、173) に、以下のとおり書かれています。

「ハネトが跳ねながらかける掛け声は、現在「ラッセラー、ラッセラー」とか「ラッセラー、ラッセラー、ラッセラッセラッセラー」であるが、以前は異なっていた。かつては囃子に合わせながら「ア (息を呑む) ラッセ、ラッセ、ラッセ、ラッセ」であり、そのあとガガシコをガンとたたく。
(以下省略) 」



彬光は、昭和 12 年、青森中学四年修了で、旧制第一高校に入学。青森を離れます。

「ラッセラッセ」の掛け声は、彬光の記憶に残る「ねぶたの原風景」だったのです。

また同書によると、「ラッセラー」の掛け声になったのは、昭和 37 年に、ある婦人団体が流し踊りを行った際に始まり、昭和 40 年代に出された佐々木新一の「ねぶた音頭」で決定的になったとされています。

『悪魔の火祭』が刊行された当時のねぶたの掛け声は、彬光が記したとおり「ラッセラッセ」だったわけです。

この作品では、「バケト【作品では「化人 (ばけと)】」のことも書かれています。

「その時、ネブタには、化人というものがつきものなんです。花笠をかぶり、男も女も顔をかくし、揃いの祭り衣装を着て、ネブタのまわりを、ラッセラッセと声をかけながら、踊りまわるものなんですけれどーその踊り子が化人なんです。(以下、省略) 」

青森ねぶたをご覧になったことがある方は、揃いの衣装を着た「ハネト」の前に、仮装をした人たちが「バケト」として露払いのように歩いていく姿を思い浮かべ、きっと、「あれ?」と思われるでしょう。これもまた、青森出身の彬光の表現としては「謎」です。

先ほどの『青森ねぶた誌』(p 173~)によれば、大正時代、新聞で「バケト」という名称が使われたのは1度だけであり、また、「ハネト」という表記もなく「踊り子」とされていたことが、大正 8 年 8 月の東奥日報のバケトの様子を伝える記述を引用して書かれています。

「踊り子には衣装のこったものが多数混じっている。(以下、省略) 」

「踊り子」と書かれているとおりで、昭和 3 年当時の様子を描いた今純三氏の「ネブタ運行の光景」でも、「おどりこ」と書かれています。

また、戦前はバケトの方が多かったこと、最も多いのが、男性が女性の長襦袢で女装したバケトであり、そもそもハネトは女の仮装をするバケトの一種であり、それが同じ衣装に統一されたものという見方もできる。としています。

彬光と同時代 (昭和 2 年生) の方の記事 (同資料 p 232) では、当時、衣装は各自勝手に、襦袢や赤襦袢、半纏、頬かむりなど様々であった。としながらも、現在の花笠ではなく、「トコマンポ」という笠をつけた人は大勢いたと、小学生の頃を回想しています。

※ 「トコマンポ」は、現在「黒石よされ」でつけている笠です。

「バケト」の記述が「謎」に思われましたが、「バケト」「ハネト」という言葉が使われはじめ、女性の仮装をする人たちが多く、統一されていく過程の中にいた彬光の表現は、決して間違っただけのものではない、青森ねぶたの時を刻んだものではないでしょうか。

時が、謎をつくるのは、推理小説のトリックだけでは無いようですね。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757

電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

こどものひろば



拡大版だよ！

大好きなあひ絵本にいつでも会える！「**Nonokko**」に集まれ！



Nonokko コーナー。絵本は、タイトルのあいうえお順に並んでいます。

図書館の大切な仕事の一つに、読書相談があります。

初めて子育てをする家族の方から、「子どもにどんな絵本を読ませたり、聞かせたらよいのでしょうか？」

という相談や、雑誌等で紹介されている絵本を実際に手に取ってみたいという声が多く聞かれます。

でも、紹介したい絵本は、子どもたちにとっても人気があり、いつも貸出されている状況です。

保護者の方々に知ってほしい、子どもたちに手に取ってみたい絵本が、いつでもそこにある。そんな本棚が、児童閲覧室にできました。

子どもたちが多くの本に出会うことができる、夢の空間。

名前は、「**Nonokko(ののっこ)**」。
※「**Nonokko(ののっこ)**」の本は、青森市の（一財）大坂会さんよりご寄贈いただきました。
ありがとうございました。



Nonokko の棚には、みんなの好きな、あの絵本のキャラクターも…。

【「Nonokko(ののっこ)」ってどんな意味？】

「ののっこ」の「のの」とは、幼児語で、尊いものを指す言葉です。

言葉としては古くからあり「ののさま・さん」や「のん」「のおの」など、全国にのこる言葉です。青森でも、「おつきさまいくつ」という遊ばせ歌“ののさまなんぼ 十三(じゅうさ)にななつ・・・”が伝わっていますが、月を尊いものとして、地方ごとに歌詞や展開にバリエーションを加えながら全国隈なくあります。

子ども達は、みんなの宝物、大切に守りたい「のの」さんです。また大人は、子ども達を月のような優しい光で照らし、見守る、子ども達にとって、大切な者として「のの」と慕われるように、と願ったものです。そして、かわいらしいものにつける接尾語「っこ」をつけ、親しまれる名前となるよう思いを込めました。



Nonokko の絵本は、かわいい「ののっこ」シールが目印です。



図書館のリニューアルオープンで児童閲覧室にお目見えした「**Nonokko(ののっこ)**」ですが、早速たくさんの方々に楽しんでいただいています。

子ども達はもちろんのこと、大人の方々も、懐かしい思い出の絵本に出会うことのできる場所となっているようです。

懐かしい「大好きな友達」といつでも会える場所に。そして、新しい「大好きな友達」と出会える場所に。「**Nonokko(ののっこ)**」は、そんな場所でありたいと考えています。

※「**Nonokko(ののっこ)**」の本は、いつでも皆さんに読んでいただけるよう、貸出ができません。貸出できる同じ本がありますので、カウンターにお尋ねください。



絵本の主人公たちも待ってるよ！
いっしょにあそんでね！



江戸時代初期のキリシタン弾圧を題材にした遠藤周作の歴史小説『沈黙』が米国のマーティン・スコセッシ監督により映画化され、大きな話題を呼んでいます。

この作品の主な舞台は長崎県ですが、当時は禁教令によって全国各地でキリシタンに対する迫害が行われており、青森県もまた例外ではありませんでした。

「邪教を改めざる者は悉く奥の津軽に配流すべし」(「台徳院殿御実紀 卷廿五 慶長十九年正月廿六日」『徳川実紀 第一篇』吉川弘文館)との幕府の命により、70 名余りのキリシタンが京都や大阪から津軽へと流されたのは、1614(慶長 19)年のこと。

当時日本に在留していたイエズス会宣教師は、流刑者に対する弘前藩での処遇について「領主から慈愛をもって迎えられた。私たちが聞いたところでは、彼はさらにいくらか彼らの費用を分担しようと望んでくれたほどである」(ガブリエル・デ・マツス「1614 年度日本年報」『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第2期第2巻』同朋舎出版 1996)と書き残しています。

この領主とは、二代藩主津軽信枚のぶひら(1586～1631)。イエズス会の記録(レイス・フロイス「1596 年度日本年報」『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第1期第2巻』同朋舎出版 1987)によれば、初代藩主為信の命により幼い頃に兄の信建のぶたけと共に洗礼を受けたキリシタンであるとされていますが、今のところ国内にそういった記録は見つかっていません。

やがて、津軽の荒地を開墾して細々と暮らす流刑者達が、地元住民にキリストの教えを広め、洗礼を授けていたことが発覚。幕府からの厳命を受けた信枚は、今からちょうど 400 年前の1617(元和3)年、宣教した流刑者2人とその妻1人、さらに改宗した住民3人の計6人を高岡で処刑したのです(D.バルトリ「イエズス会史」『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第2期第2巻』)。

宣教師達の目には「熱心なキリシタンで(中略)甲冑に十字架をつけてその證據しょうことしてみた」(『キリシタン大名』ミカエル・シュタイシェン著 吉田小五郎訳 乾元社 1952)と映った一方で、徳川家康の側近として知られた天台宗の僧・天海に師事し、東照宮を勧請した信枚。

彼にとって、キリシタン信仰とは一体どのようなものだったのでしょうか。

なお、キリシタンの津軽流刑を題材にした小説に、日本の幻想文学の第一人者・皆川博子のデビュー作「海と十字架」(『皆川博子コレクション 5』出版芸術社 2013)があります。

今回ご紹介した資料は、いずれも館外への貸出が可能です。ご希望の方は当館職員にお問い合わせ下さい。

青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様にも広くご利用いただいております。

ようこそ文学館へ！

近代文学館資料の紹介(第26回)

第156回直木賞(直木三十五賞)が、青森市生まれの恩田陸さんの「蜂蜜と遠雷」に決まりました。青森県生まれの作家としては3人目となる快挙で、うれしいニュースでした。直木賞は、新進・中堅作家によるエンターテインメント作品の単行本のなかから、最も優秀な作品に贈られる賞です。正賞は懐中時計で副賞は100万円ということです。そういえば文学賞の賞品には時計がよく選ばれています。

高木恭造 “満州文話会作品賞”



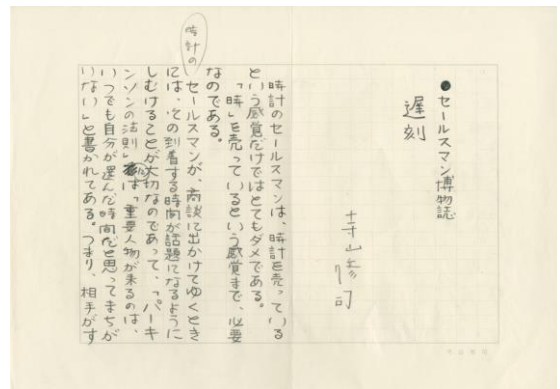
昭和4年、満州医科大学を卒業した恭造は満州で眼科医として勤めながら詩作を続けます。昭和14年、36歳の時、第3詩集『鴉の裔』を刊行。これが第一回満州文話会作品賞を受賞。関東軍司令部より、銀時計を授与されました。

今官一 “第15回直木賞”



青森生まれで初の直木賞を受賞したのは今官一。昭和31年、『壁の花』で受賞しました。官一が47歳の時のことです。正賞の時計、当時は腕時計だったんですね。

時計にまつわる資料といえば、寺山修司自筆原稿「セールスマン博物誌」があります。当館にはこのシリーズのうち、「占」「憎む」「遅刻」などの10の原稿があります。これはシチズンの社内報「シチズンセールスニュース」に掲載されたことが判明し、平成28年4月に大きく報道されました。



ご紹介した資料は近代文学館常設展示室でご覧いただけます。

カウンターからひとこと(第26回)



今回は、「貸出延長」についてお知らせします。

貸出延長とは

本の貸出期間は2週間です。しかし、貸出期間内に読み切れないなどの理由で「もう少し借りていたい」というときに貸出期間を **1週間ずつ**、**2回まで**延長することができます。貸出延長の受付は、**返却期限日の3日前から**承ります。ただし、他の方の予約がある本や貸出期限日から1週間以上過ぎた本は貸出延長できませんのでご了承ください。

貸出延長が便利にできるようになりました

これまで、貸出延長をするためには開館時間内に電話で連絡していただく必要がありましたが、平成28年12月に図書館システムを更新し、**ホームページ(HP)で貸出延長ができるようになりました。**



“いつでも” “どこでも” 貸出延長ができます。

HPで貸出延長をしたい!

HPでの貸出延長は、「オンライン貸出サービス」の申込みを行い、パスワードの交付を受けていただくことでご利用いただけます。

オンライン貸出サービスは、貸出延長だけでなく所蔵している本の予約や利用状況の確認ができるなど便利なサービスです。

申込みは、カウンターか郵送で受付けています。この機会にオンライン貸出サービスをご利用ください。

HPでの貸出延長をしてみよう!

- ① HPにある「利用者ログイン」に利用者番号とパスワードを入力後「ログイン」を押します。

利用者ログイン

利用者番号

パスワード

▶ 初めてご利用になる方へ

🔒 ログイン

HP トップにある
「利用者ログイン」画面

ログイン後に表示
される利用状況画面

- ② 延長したい本のチェックボックスを**チェック**し、「**貸出延長**」を押します(延長可能な本にチェックボックスが表示されます)。

利用状況表示

あなたに貸出中の本・資料です。

貸出延長	項番	資料番号	延長回数	返却期限日	備考
☐	1	102143 28326	0	2017/01/ 21	震える牛

▶▶ 貸出延長 ← クリア